

国語辞書に見る「騒音」概念の変遷について*

◎永幡 幸司、大門 信也(福島大学)

1 はじめに

騒音という語は、騒音の研究者のみが用いている語ではない。例えば新聞等でも語句説明なしに用いられているように、極日常的な語であると言えよう。それでは、研究者が用いている意味と、日常的に用いられている意味は、同一であろうか。そもそも、騒音という語が一般的な語彙として定着したのは、いつ頃からであろうか。

本研究では、日常語としての「騒音」という語の意味内容の変遷を明らかにすることを目的とし、「近代的国語辞書」¹⁾における「騒音」及び「噪音」という語の意味内容の変遷を調査した。ここで、調査対象として国語辞書を選んだのは、例えば倉島が「社会一般の通念として、辞書の記述に正確さと規範性が強く求められ、辞書もまたその期待に応えている」²⁾と指摘しているように、辞書はそれが発行された時代の社会における、個々の語の意味内容の規範を記述していると考えられるからである。

2 調査対象

本研究で調査対象とした辞書は、表1に示したとおりである。これらの辞書は、1950年までに発行されたものについては「近代国語辞書の歩み」¹⁾及び「近代辞書に魅せられて」³⁾に記載された辞書のうち、国立情報学研究所のNACSIS Webcat(<http://webcat.nacsis.ac.jp/>)に登録されている全ての国語辞書であり、その年代に発行されたことが確認されている辞書のほとんど全てを網羅している。それ以降に発行されたものについては、福島大学図書館が所蔵している国語辞書全てと著者らが所有しているものである。

3 「騒音」及び「噪音」の意味内容の分類

調査対象とした辞書における「騒音」及び「噪音」という語に対する語義の記述は、「さはがしい音」(『言苑』)のように非常に短いものから、「好ましくない音の総称。非常に大きい音、不快な音、工場・交通・建設作業などの都市公害としての騒音など。」(『日本語大辞典』)のように例を交えた比較的長いものまで様々ある。しかし、それら記述を比較すると、そこにはいくつかの典型的な意味要素があり、それぞれの辞書はそれら

の組合わせによって、語義を示していることがわかる。その典型要素を以下に示す(以下本文中でこれら典型要素を示すときは、下のゴチック体部を示す)。

非楽音 「振動が急激に生滅するか若しくは不規則なるかの音。調子にのらぬ音。楽音の対。」(『辞林』)のような、いわゆる非楽音

うるさい 「さわがしき音」(『大日本国語辞典』)や「さわがしくやかましい音」(『言林』)、「やかましく、うるさい音」(『広辞苑』)のような、うるささを表わす感覚表現語によって表わされる意味

不快 「不快感を与える音」(例えば『学研 新世紀大辞典』)のような、「不快」もしくは「不快感」という語で表わされる意味

じゃま 「或る目的にとって不必要な音、障害になる音」(『広辞苑 第二版』)や「うるさくてじゃまになる音」(『学研国語大辞典』)のような、「不必要」や「じゃま」という語句によって表わされる意味

大きさ 「八十フォン以上の大きな音など」(『日本国語大辞典』)のような、物理的に大きな音という意味

表1の右側では、これらの典型要素を用いて各辞書における「騒音」及び「噪音」という語の語義を整理した結果を示している。表中()で示した数は、(1)しかない辞書は語義が1つであることを、(2)まである辞書は語義が2つあることを意味し、それぞれの語義に含まれる典型要素の欄に記してある。この表から明らかなどおり、多くの辞書において非楽音を含む語義と含まない語義の2つの語義が掲載されている。そして、非楽音を含まない語義においては、必ずうるさいが含まれている。以下、非楽音を含む語義全般を「非楽音」、含まない語義全般を「うるさい」と記す。

4 「騒音」の意味内容の変遷

表1に示した結果を基に、以下、「騒音」という語の意味内容の変遷を示す。

4.1 「噪音」の出現

国語辞書においてはじめて「噪音」の語が現われたのは、1907年に発行された『辞林』においてである。ここでは、「【理】振動が急激に生

*Historical Changes of the Concept of *SOU-ON* (Noise) on the Japanese Dictionaries by Koji Nagahata and Shinya Daimon

滅するか若しくは不規則なるかの音。調子にのらぬ音。楽音の対。」と記述されている。ここで【理】という記号は理学用語であることを意味する。山田によれば、『言海』で国語辞書の基礎が確立された以降は、専門辞彙等の百科語彙を付け加えることで採録する語彙数を増やすという編集方針をとる辞書が主流であった¹⁾という。この語も正にこのような背景により採録されたと考えられる。実際、『辞林』以前に発行されている物理学の教科書を調べると、少なくとも1892年には学術用語として「操音」が用いられている⁴⁾。

『辞林』で「噪音」という語が辞書に登場して以降、「騒音」「噪音」とともに採録していない辞書は、『ローマ字でひく国語辞典』のように語彙数を増やすよりは小型化することを目指した辞書か、辞書の編集方針として、『言海』の編集方針である、国語辞書には「高尚ナル学術専門ノ語ノ如キヲバ収メズ」というものを受け継いだもののどちらかである。そして、「騒音」あるいは「噪音」を採録している辞書のほとんど全てが、語義として「非楽音」を挙げている。

理学用語ということに関連して、1943年の師範学校教科書科学用語選定委員会において、物理用語としての「噪音」は「抹殺」し、「非楽音」という言葉を用いることを音響学の専門家も賛成して決定した⁵⁾という記録が残っている。しかし、それ以降に発行された辞書のうち、「噪音」または「騒音」が非楽音の意味であると記載されたものを見ると、1955年までに発行されたものについては、小型化を指向して作られた『小言林』を除いた全ての辞書において、「理学用語」もしくは「物理学用語」である事を示す記号がつけられている。また、それ以降に発行されたものであっても、そのような記号がつけられているものが散見される。これは、学術的世界での常識の変化が、必ずしも世間の常識に反映されるわけではないことを示す一例であろう。

4.2 「うるさい音」としての「騒音」の出現

1916年に発行された『大日本国語辞典』に見られる「さわがしき音」という記述が、辞書が「騒音」もしくは「噪音」に「うるさい」の語義を与えた初めての記述である。この辞書では、「非楽音」もともに掲載されている。

この後しばらくの間、『改修言泉』を除くと、「噪音」に「うるさい」の語義が与えられない辞書の発行が続く。そして1935年に『増補新辞典』と『大辞典』において、「騒音」または「噪音」に「うるさい」の語義が与えられている。こ

の後に発行された辞書においては、ほとんど全てにおいて「騒音」あるいは「噪音」に「うるさい」の語義が与えられている。

このことより、辞書において「騒音」あるいは「噪音」の語義に「うるさい」が定着したのは、1935年頃だと考える。そして「辞書の規範性」²⁾を考えると、世間一般において「騒音」あるいは「噪音」の語が「うるさい」の意味を持つものであると認められるようになったのも、この頃からであると推察される。1934年に書かれた「都市噪音」に関する報告書において、「都市の噪音なる言葉は既に何人にも常套語であつて、普通其儘解釋を付けずに使用しても少しも支障なしに通用せらるゝのである」⁶⁾との指摘が見られることは、この推察の正しさを裏付けるものである。

4.3 混同型の出現

1921年に発行された『改修言泉』には、「噪音」に対し、「うるさい」の語義の他に、理学用語として「不規則なる波動もしくは楽音を形成するに達せざる少数の波動より生じ、人の耳に調子ととののはで、喧しき感をなす音。」という「非楽音」と「うるさい」が混同された語義が掲載されている。この辞書が発行された時期に用いられていたと考えられる物理の教科書の中には、「音響が不規則に連続する時は之を噪音」⁷⁾と呼び、「噪音は不快の感を与ふ」⁷⁾と記述しているものがある。おそらく、この辞書の編者は、このような記述がある物理の教科書を参考として、語義を書いたのであろう。

この記述を皮切りに現在に至るまで、多くの辞書においてこのような非楽音とうるさいまたは不快が混同された語義(以下「混同」)が与えられている。最近では、1994年に発行された『学研 現代新国語辞典』と『岩波国語辞典第5版』が、「騒音」に「混同」の語義を与えている。近年に至るまでこのような語義が記載されているのは、山田が「本邦作成の辞書には先行書の模倣・追随・盗窃が頗る多い」¹⁾と指摘するように、辞書が作成される際に、先行の辞書のみが参考とされ、最新の専門書等が参考にされることなしに、語義が与えられたことによると推察される。

4.4 「騒」か「噪」か

1935年においてはじめて、辞書に「騒音」という表記が現われた。『辞苑』においては、「噪音」という語に対し非楽音の語義の記述をし、「騒音」という語に対しては「噪音」と記述してある。同じ年に出版された『大辞典』においては、「噪音・騒音」という語に対し「混同」及び

「うるさい」の語義が与えられている。このように、この年に出た辞書においては、「騒音」と「噪音」は同じ語として扱われていた。

1938年から1950年までの間に出版された辞書においては、「非楽音」に対しては「噪音」の文字を用い、「うるさい」に対しては「騒音」を用いるという使い分けが為されていた。これら用字法について、同時期に音響学者が騒音について書いた文献を調べると

1. 先の報告書⁶⁾(1934)では非楽音の意味にも「都市噪音」の場合にも「噪音」と表記
2. 『音』⁸⁾(1935)に「殊に最近問題とせられる都市の噪音と言ふ様な場合(中略)特に騒音と云ふ文字を用いて上記の定義による噪音(著者駐:非楽音のこと)と区別する事もある」という記述あり
3. 『騒音防止』⁹⁾(1937)において「噪音(著者駐:非楽音のこと)と区別する為に都市騒音の如き場合には“騒音”を使用すると云ふ説があり(中略)相当廣く用ゐられてゐるので、本書に於ても之を使用する」という記述あり

のようになっている。これらより、辞書において1938年から漢字が使い分けられているということは、世の中の動きをよく反映したものであると言えよう。

1951年以降、「非楽音」に対しても、「うるさい」に対しても、「噪」と「騒」の両方の字が当たっている辞書が多くを占めるようになっていく。これは、当用漢字¹⁰⁾に「噪」という字が選定されなかったことによると考えられる。しかしながら、当用漢字に付随して出された国語審議会の「同音の漢字による書きかえ」¹⁰⁾という報告には、「噪」を「騒」と置き換えるという指示は見られない。このこととこれまでに示した用字の変遷を併せて考えると、「うるさい」に対して両方の字を当るのは、妥当なものであるが、「非楽音」に対して「騒音」を用いるのは誤りであると考えられる。

4.5 大きさによる定義

現時点で調査した資料の中では、1968年の『学研 新世紀大辞典』においてはじめて、「騒音」の語義に音の大きさに関する記述が出現する。この辞書においては、「やかましい音。さわがしい音。不快感を与える音。主観的なものであるが、客観的には騒音計による音圧の測定(単位ホン)によって決められる。普通80ホン以上の音は大きさの理由だけで騒音とされる。」と記述されてい

る。ここで、この辞書が出版される直前に出版された音響学者による騒音関係の著作を調べると、『騒音の話』の中に「ある音が騒音であるか否かはそれを聞く人の主観的判断によるわけである」とした上で、「騒音レベルが例えば80ホン以上の音はまず騒音と考えられる。しかし、これが騒音を規定する全部ではなく、もっとずっと小さい音でも騒音であり得るから絶対的に何ホン以上が騒音であるというようなことはいわれない」¹¹⁾という記述が見られる。この辞書の語義は、これもしくはこれに類する記述を参考に書かれたものであると推察される。

この辞書の後に出版された辞書で、大きさについての記述がある辞書においては、『日本国語大辞典』の「非常に大きい音」という記述を除き、「80ホン」または「80dB」が何の断りもなく騒音を決める基準として挙げられている。これは、『学研 新世紀大辞典』のみを参考に、それを簡略化して語義を書いたのではないかと推察する。「混同」型の項でも述べた通り、「本邦作成の辞書には先行書の摸倣・追随・盗窃が頗る多い」¹⁾ことの現われであろう。

5 まとめ

国語辞書に見られる「騒音」及び「噪音」は、学術用語とは異なった定義によって変遷してきたことがわかった。また、学術用語であるとしながら、学術用語としては明らかに間違った語義を与えている辞書が散見された。

参考文献

- [1] 山田忠雄, 近代国語辞書の歩み, (三省堂, 東京, 1981).
- [2] 倉島節尚, 辞書は生きている, (ほるぷ出版, 東京, 1995), p.33.
- [3] 境田稔信, 近代辞書に魅せられて, (モリサワ・タイポグラフィ・スペース, 東京, 1998).
- [4] アルフレッド・ダニエル原著(木村駿吉補訳), 物理学原論, (内田老鶴圃, 東京, 1892), p.634.
- [5] 日本音響学会, “師範学校教科書科学用語決定さる,” 日本音響学会誌 4, p.48, (1943).
- [6] 東京市電気研究所, “都市噪音の防止に関する調査資料,” 東京市電気研究所調査報告 第八号, p.10, (1934).
- [7] 森總之助編, 実験及び理論 物理学 音響学, (積善館, 大阪, 1927), pp.69-70.
- [8] 小幡重一, 音, (岩波書店, 東京, 1935).
- [9] 高田實, 騒音防止, (修教社, 東京, 1937).
- [10] 文部省, 現代の国語表記の基準, (帝国地方行政学会, 東京, 1968).
- [11] 守田栄, 小橋豊, 騒音の話, (日本労働文化協会, 東京, 1962), pp.1-2.

表 1: 国語辞書における「騒音」の意味内容の変遷

辞書名	発行所	初版年	典型要素				
			非音音	うるさい	不快	大きな	じゃま
漢英対照いろは辞典	長尾景弼	1888					
ことばのほやし	清水卯三郎	1888					
和漢雅俗いろは辞典	長尾景弼	1889					
言海	大槻文彦	1889-1890					
日本大辞書	日本大辞書発行所	1893					
増訂二版和漢雅俗いろは辞典	いろは辞典発行部	1893					
日本大辞林	宮内省	1894					
日本大辞書	明法堂	1894					
日本新辞書	松雲堂	1895					
帝国大辞典	三省堂	1896					
日本大辞典	博文館	1896					
日本新辞林	三省堂	1897					
ことばの泉	大倉書店	1898					
中辞林	積文社	1903					
辞林	三省堂	1907	噪(1)				
辞林 増補再版	三省堂	1909	噪(1)				
俗語辞海	集文館	1909					
辞林 改訂	三省堂	1911	噪(1)				
増訂ことばの泉	大倉書店	1914					
辭海	郁文舎	1914	噪(1)				
大日本国語辞典	富山房	1916	噪(1)	噪(2)			
ローマ字でひく国語辞典	富山房	1918					
辞林(縮版)	三省堂	1918	噪(1)				
改修言泉	大倉書店	1921	噪(1)	噪(1)(2)			
広辞林	三省堂	1925	噪(1)				
言海中形	六合館	1927					
小辞林	三省堂	1928	噪(1)				
Reflex国漢外語辞典	実文館	1930	噪(1)			噪(1)	
大言海	富山房	1933-1934					
増補新辞典	至文堂	1935	噪(1)	噪(2)			
辞苑	博文館	1935	噪(1)騒(1)				
大辞典	平凡社	1935	噪(1)騒(1)	噪(2)騒(2)	噪(1)騒(1)		
言苑	博文館	1938	噪(1)	騒(2)	噪(1)		
増訂大日本国語辞典	富山房	1940	噪(1)	噪(2)			
広辞林(新訂版)	三省堂	1942	噪(1)	騒(2)			
言苑	博友社	1945	噪(1)	騒(2)	噪(1)		
言林	全国書房	1949	噪(1)	騒(2)			
小言林	全国書房	1949	噪(1)	騒(2)			
広辞林(新訂版)	三省堂	1950	噪(1)				
辞鑑	河野書店	1950					
口語辞典	森北出版	1951		噪(2)騒(2)			
ローマ字で引く国語新辞典	研究社	1952	噪(1)騒(1)	噪(1)騒(1)			
研究社国語新辞典	研究社	1952	噪(1)騒(1)	噪(1)騒(1)			
辞海	三省堂	1952	噪(1)騒(1)	騒(2)			
明解国語辞典	三省堂	1952	噪(1)騒(1)	噪(2)騒(2)			
広辞林(新訂版)	三省堂	1955	噪(1)				
広辞苑	岩波書店	1955	噪(1)	騒(2)			
新訂大言海	富山房	1956					
新版広辞林	三省堂	1958	噪(1)騒(1)	噪(2)騒(2)	噪(1)騒(1)		
復讐新辞典	東京書院	1958	噪(1)				
新選国語辞典	小学館	1959	噪(1)騒(1)	噪(2)騒(2)	噪(1)騒(1)		
三省堂国語辞典	三省堂	1960	噪(1)騒(1)	噪(2)騒(2)			
広辞典 増訂版	集英社	1961		騒(2)			
岩波国語辞典	岩波書店	1963	噪(1)騒(1)	騒(2)	噪(1)騒(1)		
新潮国語辞典	新潮社	1965	噪(1)騒(1)	噪(2)騒(2)			
三省堂新国語辞典	三省堂	1967	噪(1)騒(1)	噪(2)騒(2)	噪(1)騒(1)		
学研 新世紀大辞典	学習研究社	1968	噪(1)騒(1)	噪(2)騒(2)	噪(2)騒(2)	噪(2)騒(2)	
角川国語辞典	角川書店	1969	噪(1)騒(1)	噪(2)騒(2)			
広辞苑 第二版	岩波書店	1969	噪(1)	噪(2)騒(2)			噪(2)騒(2)
旺文社国語辞典	旺文社	1970	噪(1)騒(1)	噪(1)(2)騒(1)(2)			噪(1)騒(1)
同音語中心 国語辞典	教育出版	1970	噪(1)騒(1)	噪(2)騒(2)			
岩波国語辞典 第2版	岩波書店	1971	噪(1)騒(1)	騒(2)	噪(1)騒(1)		
広辞林 第五版	三省堂	1974	噪(1)騒(1)	噪(2)騒(2)	噪(1)騒(1)		
辞海	三省堂	1974	噪(1)騒(1)	騒(2)			
日本国語大辞典	小学館	1974	噪(1)騒(1)	噪(2)騒(2)		噪(2)騒(2)	噪(2)騒(2)
広辞苑 第二版補訂版	岩波書店	1976	噪(1)	噪(2)騒(2)			噪(2)騒(2)
岩波国語辞典第3版	岩波書店	1979	噪(1)騒(1)	騒(2)	噪(1)騒(1)		
国語辞典	講談社	1979	噪(1)騒(1)	噪(2)騒(2)	噪(1)騒(1)		
国語辞書	集文館	1979		騒(1)			
新明解国語辞典 第三版	三省堂	1981	噪(1)騒(1)	噪(2)騒(2)	噪(1)騒(1)		
国語大辞典	小学館	1981	噪(1)	噪(2)騒(2)		噪(2)騒(2)	噪(2)騒(2)
「常用」新版 新選国語辞典	小学館	1982	噪(1)騒(1)	騒(2)	噪(1)騒(1)		
新編大言海	富山房	1982					
広辞苑 第三版	岩波書店	1983	噪(1)	噪(2)騒(2)			噪(2)騒(2)
旺文社詳解国語辞典	旺文社	1985	噪(1)騒(1)	騒(2)	噪(1)騒(1)		
類語国語辞典	角川書店	1985	噪(1)騒(1)	騒(2)	噪(1)騒(1)		
岩波国語辞典第4版	岩波書店	1986	噪(1)騒(1)	騒(2)	噪(1)騒(1)		
新選国語辞典 第六版	小学館	1987	噪(1)騒(1)	噪(2)騒(2)	噪(1)騒(1)		
大辞林	三省堂	1988	噪(1)	噪(2)騒(2)			
学研国語大辞典	学習研究社	1988	噪(1)	噪(2)騒(2)	噪(1)		噪(2)騒(2)
日本語大辞典	講談社	1989	噪(1)	噪(2)騒(2)	噪(2)騒(2)	噪(2)騒(2)	
新明解国語辞典 第四版	三省堂	1989	噪(1)騒(1)	噪(2)騒(2)	噪(1)騒(1)		
集英社 国語辞典	集英社	1993	噪(1)騒(1)	騒(2)	騒(2)		
学研 現代新国語辞典	学習研究社	1994	噪(1)騒(1)	噪(2)騒(2)	噪(1)騒(1)		噪(2)騒(2)
岩波国語辞典第5版	岩波書店	1994	噪(1)騒(1)	騒(2)	噪(1)騒(1)		
大辞泉	小学館	1995	噪(1)	噪(2)騒(2)	噪(2)騒(2)	噪(2)騒(2)	噪(2)騒(2)
現代国語辞典	日本文芸社	1996		騒(2)			
広辞苑 第五版	岩波書店	1998	噪(1)	噪(2)騒(2)			噪(2)騒(2)

表中、「噪」は「噪音」という表記に対して、「騒」は「騒音」という表記に対して、該当する典型要素を含む語義が与えられていることを表わす。また、()で示した数は、(1)しかない辞書は語義が1つであることを、(2)までである辞書は語義が2つあることを意味し、それぞれの語義に含まれる典型要素の欄に記してある。